

長編少年少女小説

ひ　　ご　　いし　　く
肥後の石工

今西祐行



NDC 913

長編少年少女小説

ひご いしく
肥後の石工

今西祐行著

実業之日本社 1965年

212頁 21.3cm

本文10ポ活字使用

小学校上級・中学校向

著者の了解により

検印省略

ひご いしく
肥後の石工

1965年12月15日 初版発行

1970年2月25日 16版発行

著者 今西祐行

発行者 増田義彦

印刷所 壮光舎印刷株式会社

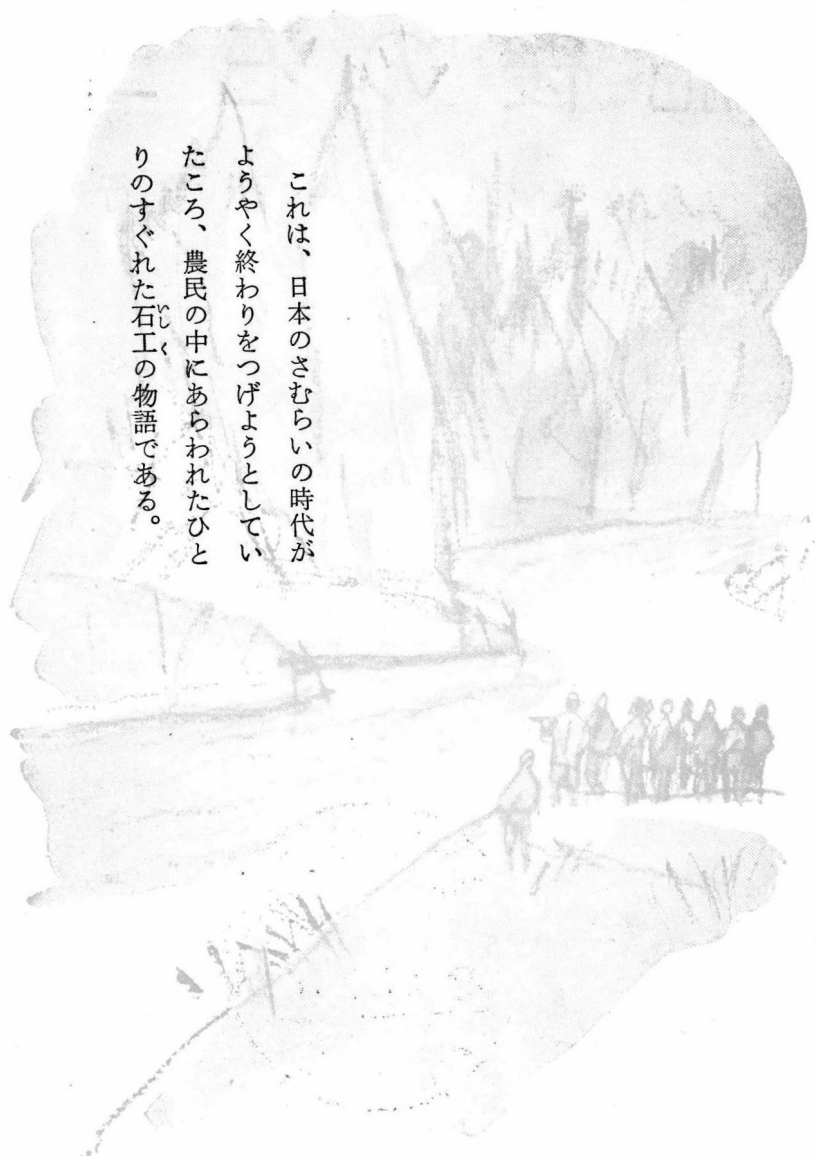
発行所 株式会社 実業之日本社

104 東京都中央区銀座1～3～9

TEL (562) 4311 振替東京326

定価 400円

これは、日本のさむらいの時代が
ようやく終わりをつげようとしてい
たころ、農民の中にあらわれたひと
りのすぐれた石工いしぐの物語である。



9	8	7	6	5	4	3	2	1	
丈八老人……………	石うつ音……………	石切場……………	種山村……………	日奈久の湯……………	ツルのむれ……………	徳之島の仁……………	ふしぎなさむらい……………	かわらこじき……………	はじめに……………
(じやうはちろうじん)		(いしきりば)	(たねやまむら)	(ひなぐゆ)		(とくのしまじん)			
79	69	56	48	42	32	24	16	8	5

22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10
おわりに……	ゆめの橋……	郡代屋敷……	誤解……	おとがめ……	仁の子守歌……	わかれ……	人さらい……	はじまった工事……	まぼろしの恩人……	夜道……	寄りあい……	かきもちの知恵……
204	192	182	174	166	156	149	131	125	115	110	97	88

井

口 くち 口

文

秀 しゅう



西田橋 にしだばし

はじめに

鹿児島市の中央をながれる甲突川に、川上から、玉江橋、新上橋、西田橋、高麗橋、武之橋と、石づくりの美しいめがね橋が五つかかっている。なかでも、むかし城下のおもてに面していた西田橋は、参勤交代の行列がとおる本道にあり、五つのうちでいちばん大きくりっぱである。そして、西田橋のらんかんだけには、青銅のぎばうしゅうがついている。

このぎばうしゅうには、慶長十七年（一六二二年）六月吉日ときざまれているが、じつは、これらの橋がかけられたのは、天保八年（一八三七）年から十年にかけてのことで、島津二十八代めの城主斉興が、肥後の国からわざわざ、すぐれた石工をよんで、かけさせたものであった。

では、どうして二百年もさかのぼった日づけがきざまれているのだろうか。



橋はしのたもとにある立札たてふしの説明せつめいによると、江戸幕府えどばくふは、橋はしのつくりにも、城主じやうぢゆのくらしいによって、きびしいきまりをつくっていたからであるという。

つまり、ぎばうしゆのある橋はしは、城主じやうしゆが中納言ちゆうなごんいじょうのくらしいでないと、つくることができなかつたのだ。斉興なりおきはそのくらしいをもっていなかつた。そこで、島津十八代しまづめの殿さま家久いえひさが中納言ちゆうなごんであつたので、この橋はしは、十代じゆだいも先祖せんぞの中納言ちゆうなごん家久いえひささまがおかけになつたものですぞと、幕府ばくふのおとがめをごまかしたのであるという。

西洋文明せいようぶんめいをいちはやくとりいれたハイカラごのみの殿さまであつた斉興なりおきのこゝとだから、そのくらしいのみえははつたのかもしれない。だが、はたしてただそれだけのことであつたらうか。

ところで、この橋はしには、きみのわるいいいつたえがのこっている。深夜しんやになると、ひとだまのような形のこのぎばうしゆが、かみふりみだした女の顔になつて、なくとも、わらうともつかない、ヒイヒイとぶきみな声をたてるという。また、これらの橋はしには、ひとつのひみつがあつたらしい。どの橋はしも、中央ちゆうおうのひとつの石をとりはずすと、重力かんけいの關係で、つぎつぎと石がくずれおち、かんたんにとりこわせるしくみになつていたという。敵てきがせめてきたときに、橋はしを



おとして城をまもるしかけだったのである。

こうしたひみつをまもるために、工事がおわると、肥後の石工たちは、全員永送りになつたらしい。

『永送り』というのは、ひと目につかないように、刺客をつかわして国境できりすてることだ。

夜ごと橋の上にでるゆうれいは、ふる里でおつとや父の帰りをまちわびていた、これらあわれな石工たちの、つまや子どものたましいであるという。

鹿児島によばれた石工は、主として肥後の国八代の東にある種山村に住む人たちで、石工頭は岩永三五郎、その技術は、加藤清正が熊本城をきずいたとき、そのながれをくむものであるという。

いまでもむかしのままのころ熊本城の石がきは、『武者がえし』といって、美しいそりがあるので有名だが、この石がきのつまかたは、清正が朝鮮征伐にいておぼえてきたといわれている。

石ひとつひとつのおもさによって、ますますつよさをますように、力学的にくふうされたものである。こうした技術を、岩永三五郎は、石だけでつくるアーチ型のめがね橋に応用したものであらう。



1 かわらこじき

「あねちゃー、おら、足がいとうてあるけんに……。」

吉はそういつて、さきにいくあねの里をよびとめた。だが里はふりむきもしない。

「はよーこう。あん人ば、みうしなうに。」

そういつたまま、すたすたとかけるように歩きつづける。

里は十二、三、吉はまだ八つか九つくらいだろう。しかし、ふたりとも自分の年などしていそうにない。

きているものは、ぞうきんのようなきもの。それを胴のところで、ぎゅっとあらなわでしめているだけである。

いまさつき、野間の関所をかけぬけようとしたとき、関所のさむらいは、

「黒糖が、タバコの葉っぱをきてにげよるぞ。にがすわけにやーいくまいて。」

そういつて、ふたりをつかまえた。

ふたりの顔も手足も、まるで黒ざとうのように黒く、そのきものは、ほしたタバコの葉っぱのような色をしていたからである。

さとうとタバコは、薩摩さつまの国のだいじな特産物とくさんぶつで、どんなにすこしでも、他国へのもちだしはきびしく禁じられていた。薩摩さつまの関所かんしよは、それをとしまるのがおもだったしごとである。

関所かんしよのさむらいは、ふたりをつかまえてはみたものの、道ばたでひろったらしい、はきふるしの、ちびたわらじを、だいじそうにふところにいれていただけで、なにひとつもっていないのにあきれ、じょうだんをいったのである。

それでも、ああだ、こうだと、からかい半分のとりしらべをうけ、すっかりおくれてしまったのを、里さとは気にしていた。

「あねちゃ、どうしてあん人のあとばかり追うんだ。おら、これ、はこうとおもうに。」

吉は、ふところにだいじにしまっていたわらじを、手にぶらさげていた。

やっと里さとはたちどまって、吉きちの追いつくのをまったが、すぐにまた手をひいて、すたすたとかけるように歩きはじめた。

「あねちゃは、あん人しってんのか。」

「しらん。」

「そんな、あん人を追っかけてどうすんだ。」

「おとうのこときくんじゃ。」

「おとうをつれてった人は、あん人じゃなか。おさむらいじゃったど。刀ばもつとったど。大きいのを。あん人は、刀ばもつとらんかった。おらに、にぎりめしばくれたぞ。……あねちや、おとうはどうしたど。」

「わからん。」

吉は、まだ父親がころされたとは気づいていないらしい。だが、里にも、父親がなぜきゆうにつれていかれ、ころされてしまったのか、もちろんそのわけがわかるはずはなかった。

ふたりが父親をさがしてないっていると、女の人が出てきて、いったのだ。

「あのだんなが、ほれ、このおにぎりば、くださるとよ。いってきいてみるがいいに。」

だが、その女の人教えてくれた人は、いちどふりかえったきり、さっさと足ばやに歩いていってしまった。

（ひょっとしたら、あの人がころさせたのじゃないだろうか。）

二どとふりむこうともしないで、だまっていってしまうその人のあとをつけていると、なんだかそんな気がしてきたのである。

追いついてみたところで、こわくて声もかけられないかもしれないのだが、里はただむちゅうで、その

人のあとを追いつづけた。

きょうだいは、半月ほどまえから、父といっしょに、この薩摩^{さつま}の国の出水^{いずみ}の町にながれついて住んでいた。

住むといつても、町はずれをながれる米津川^{こめのつがわ}の川べりの、つかいふるして岸にひきあげであつたわたし船に、こもをかけてくらしていたのである。

その日、吉^{きち}は朝からかわらで石なげをしてあそんでいた。ひらべったい石をうまくなげると、石はチョンチョンと水の上をとんでいく。はじめてここにきたとき、父におしえてもらったあそびである。それがこのごろやっと、うまくできるようになった。

「おとう一っ、四つもとんだど。」

「あねちやー、みてみい、かぞえられんごといったどー。」

吉^{きち}は、石がうまくとぶごとに、そういつて大きな声で、よびたてていた。

父親^{ふち}と里^{さと}は、いくにぎりもないわずかなキビつぶを、手でもんでは、フーッと皮をふきとばして、ふくろにいれかえていた。

そのときである。ふと目のまえに人のかげがうつった。顔をあげてみると、ひとりのさむらいがたっていた。目のまえにくるまで、ふたりとも、すこしも気がつかなかった。

里はびっくりして、おもわず手のひらのだいじなキビをこぼしていた。

「おっ、お、おさむらいさまでございますな。つい、その……うっかりいたしておりまして、その、気がつきもうしませんで。おゆるしください。……これっ、里、おじぎばせんか。ほんまに、ごぶれいばいたしまして、なにとぞ……。」

父親は、あわててこわれた船からそとにでると、草の上に頭をつけ、なんどもおじぎをした。

「おう、いいぞいいぞ。なんにもおはんら（おまえら）が、そんなにあやまることはなか。それはなんじや。キビかの？」

「へ、さようで。」

「朝めしか。そげんもん、どうしてくうんじや。うまいかの。」

さむらいは、こしをかがめて、父親が手ににぎっているキビつぶをのぞきこんだ。

「キビでございます。わしらのようなかんじん（こじき）には、なによりのごちそうでございます。はい。水にひたしまして、つぶすでございます。」

「ほーっ。ところで、おはんらは、ずっとここに住んどるのか。」

「いいえ、そのつい先だってからでございます。ちようどこのお船が、ごらんのようにこわれておりますもんで、ちよっと拝借（はいしゃく）させていただきまして……ほんにすまんことばいましたです。なんとぞおゆるしを……。」



父親はじめ、このこわれた船に住んでいるのを、とがめられたのかと、おもったのである。

「いや、おいどんはなにも、そげなことをとがめとるんじやなか。なんじやか、たのしそうに、手でもんだるで、たずねてみたまでじや。」

さむらいはそういつてわらった。そして、ふところから紙つつみをとりだして、ポンとこじきのまえになげた。

まっ白なもちが四つ、こもの上にころがった。里^{さと}は、おもわず手をだして、ころがるもちをおさえた。「おさむらいさま、これは、その、おめぐみくださるのでございますか。おそれおおいことでございます。ありがとうございます。」

「いやー、礼をいわるることじやなか。じゃが、ちーと、手をかしてもらえんかのう。」

「その、なんでござましよう。わしらに、なんぞできることがござましようか。なんなりと、おいいつけくさいます。いのちをかけても、はたらかせてもらいます。」

「ほう、いのちをかけてのう。」

さむらいはそういうと、にたりとわらった。しかし、もうはじめほど、やさしげな顔ではない。

父親には、そんなさむらいの顔色をよみとるよゆうもなかった。

（もしや……）とおもって、どきどきしていた。じつはゆうべ、町の宿屋^{やどや}の物おきのそとにおいてあったキビを、手で五はいほどすくって、こっそりしっけいしていたのだ。それがみつかったのかもしれない

いと、おもったのである。

「……なら、さっそくじゃが、たのもうかのう。おいどんといっしょにきてくれんか。」

さむらいはそういうと、さっさとさきにたつて歩きだした。父親はそのあとにしたがった。

里は、自分らのようなこじきに、いったいなんの用があるのかふしぎだったが、さむらいがこわくて、だまっていた。

かわらで石をなげていた吉は、父がどこかへいくのをみつけると、おいかけていった。

「おとうー、どこへいくー。おらもつれてつとくれよー。」

吉はそばまで追っていくと、さむらいが、まるでイヌでも追うようにふりかえって「シッ」といった。

父親はふりかえらなかつた。ただ手をうしろにやって、「帰れ、帰れ」というように、あいずをした。さむらいをおそれているようすである。

里もどてまでのぼってきた。そして、ふたりはふしぎそうに父親をみおくった。

きょうだいが父親をみたのは、それがさいごだった。